
Viva

壊滅的被害からの蘇生!!

神鉄観光株式会社旅行部部長

高嶋重次

あの阪神大震災から2年半—JATA兵庫地区会としての記録文集を発行するにあたり改めて当時の新聞縮刷版や写真集、関連文献を通してタイムスリップする時、まず第一に思うのが「2年半でよくもここまで復旧できたものだ」という感慨である。

6,000人を超す死者、鉄道や高速道路、橋脚等の構造物がいとも簡単に壊される大都市直下型地震の恐ろしさと被害は、まさしく戦後最悪であったろうし、1923年の関東大震災以来類例を見ないものであったことだろう。

すべてを震災のせいにする誤謬

震災直後の惨状を目のあたりにした者にとっては、鉄道や高速道路、神戸港の港湾施設などが回復し、ハード面それ自体では神戸にも活気が戻ってきたことには一種の喜びと驚きさえ覚えるが、市内観光施設や宿泊施設がほぼ原状復帰しているにもかかわらず、神戸を訪れる観光客数は震災前の約8割にとどまっているという現状に寂しさを禁じ得ない。「震災前」の基準をどこに置くかが重要なポイントであって、ここを見誤っていつまでも震災の後遺症と嘆く発想は非生産的だと思う。

神戸経済はかつては東京の中核機能に対し支店経済を謳歌した時代もあったが、今や大阪の経済圏にどっぷりと包み込まれ大阪の支店経済に対する営業所経済といった位置づけが的を得ているような凋落ぶりで、この神戸経済それ自体の地盤沈下が、震災に関係なく、それ以前から構造的にその萌芽を含みまたその傾向にあったことを認めなければならない。

航空会社の神戸支店・営業所が10数社あったのが、今は国内3社と大韓航空の4社のみに、また在神戸領事館も10カ国あったものが、そのほとんどが大阪に移転してしまい、過去の栄華今いずこといったところか。

この時こそ神戸の政財界・自治体・住民が一致して知恵を出し合い、かつての繁栄ぶりを取り戻すべく努力しなければならないのではないだろうか。

がんばろう! Kobe

ハード面の復興ぶりとは裏腹に、いまだに仮設住宅への入居を余儀なくされている住宅整備の遅れや、人口の流出に伴う地元商店街の売上ダウン、生産・流通の変化で受注減に喘ぐ地場産業、更にはPTSD(心的外傷後ストレス傷害)等、震災の残した課題や問題は地元経済や社会生活に色濃く残っている。

かつては「神戸市株式会社」と揶揄されながらも神戸の活性化のために民間の活力をも奪う勢いでその先頭に立ってきた、その自治体にも昔日のパワーは消え失せている。

そんな中で震災の年である95年から始まった「神戸ルミナリエ」は第1回に約250万人の観光客を誘致し、昨年の第2回には385万人もの人に来ていただいている。このうち兵庫県外からの観光客は約3割といわれ、交通費や宿泊費、飲食費やショッピングもたらす経済効果は膨大なものがある。

地場のトラベルエージェントとしてもっともっと情宣活動、誘致活動にコミットしていかなければ、と考えている。

'95年1月17日午前5時46分

さてこの様な影響を今に残している阪神大震災で、鉄道、道路、港湾、電力など都市の経済社会基盤のほぼ9割までが元に戻っているといわれる中、は

たして私自身の原体験はどうであったかについて少し触れてみたい。

我が家は神戸市兵庫区にあり一帯は観測史上初の震度7(激震)地区内に位置している。7階建てマンションの5階にあり、文字通り悪夢から覚めるような衝撃で目覚めた。最初はヘリコプターかダンプカーが飛び込んできたのかとも思ったが、状況はつかめず、また隣で休んでいるはずのワイフも居ない。

とにかく当時中学2年生の息子の部屋に行き彼を起こそうとしたが、書棚が倒れてドアを塞ぎ、ベッドの端にもたれ掛かって止まっていて身動きできないという。無理にドアをこじ開けて取り敢えず無事を確認したところへワイフが息せき切って階段を駆け上がって戻って来、ゴミを捨てようとしてエレベータを降りた途端揺れが来て、そして目の前で道路に地割れが走ったのが見えたという。

私と違って早起き鳥のワイフは、息子が6時半過ぎには通学のために家を出るので、いつも5時半頃起床しているが、ワイフの説明を聞いて漸く地震が発生した状況が飲み込めてきた。

台所に全員集まったが食器棚は倒れ、高さ2m近くある冷蔵庫もひっくり返っており、とにかく明るくなるまでじっとしていることにした。

やがて空が白み始めたのでベランダに出てみると、東の三宮方面と西の長田方面には既に火災の発生による黒々とした煙がたなびいており、また南側のベランダから見ると2軒隣の信用金庫のビルや、その向こうのマンションが傾いているのが見えた。これはただならぬ事態であることが理解でき始めた。

我が家から最も近い駅である地下鉄の神戸高速鉄道大開駅の天井部分が陥没しているとの情報も後刻入り、毎朝息子はこの駅発6時50分くらいの阪急電車に乗車しており、地震の発生がもう1時間遅かったら、と冷汗の出る思いをした。この駅の陥没は関係者の間では随分ショッキングな出来事であったらしく、後日新聞に「地震に強い地下鉄神話の崩壊」と大きく報道されていた。わが家周辺の木造家屋はことごとく潰れ、またマンションやビルにもかなりのダメージが出ているようだった。

そんな周辺の事情もあってかいわゆるライフラインの復旧にも時間がかかり、電気は3日後の1月20日に、電話は1月26日、エレベーターが1月27日、水道

が2月25日、ガスに至っては3月29日に2カ月半ぶりに漸く利用できるようになった。

この間1月18日の夕刊を見、そして電気が通じた20日にテレビで被害の状況をビジュアルに見て初めて被害の甚大さが認識できた。ラジオ報道等で相当の被害が出ていることは知ってはいたが、自分が知っている建物が、あるいは鉄道線路が全く様変わりしてしまっている姿を自分の目で見るまではどうしても信じられないという心理が働いていたのだと思う。

もう一つ震災にまつわる話として風呂のことが印象深い。自宅は水道もガスも止まり、また近所の銭湯も長い間復旧工事のためかクローズしていた。22日に初めて、通常なら30分内外でいける隣接の明石市の銭湯に徒歩、地下鉄、バスと乗り継いで約2時間半かけて出掛けしたが、順番待ちの列で待つこと約1時間、自分の順番になっても入浴は10分内外という状態だったが、1週間ぶりのお湯は、肉体的な疲労と精神的な疲労を一時的ではあるにしろ癒してくれた。あの時の身体の芯までしみ渡るお湯の感触はまさに至福で、忘れられないものの一つとなっている。

またおもしろいエピソードとしては、ガス、水道が元に戻りやっと3月末に本格的な料理を家で作ったが、食器類のほとんどすべてが割れてしまっていて、その日もそれまでと同じく紙製のコップや皿を使っただけの夕食となった。水がないので紙製の器や、またはそれらにサランラップをかけて使用していた名残りで、食器のことなど忘れてしまっていた。

また食べることに関しては、会社周辺を含めてなかなか食事をする所が見つからないことと、食事メニューがラーメン・ライスといった簡単なものが圧倒的に多く、加えて食べておける時に食べておかねばという震災直後の食糧不安の経験から来る予防心理も手伝ってか、どうしても過食気味の食事になりがちであった。

私の生涯でこれ以上の自然災害、またはそれに伴う二次災害に遭遇することはまず無いであろうが、しかし様々な貴重な体験をすることができたと思う。苦難の中にも笑顔を絶やさずやってこれたお陰だと思ひ、家族の絆も一層強くなったように感じている。

老人＝社会的弱者の構図

今回の震災で同じく神戸市内にあるワイフの実家が全壊し、家族全員と大きな犬1匹が我が家に緊急避難してきた。ワイフの母は当時87歳で老人性痴呆症に掛かっており、それまでも週に一度はデイケア・センターのお世話になっていた。今回我が家に引き取って一緒に暮らしてみたら先程も触れたように電気、ガスがストップした状態で暖房も思うに任せず、また私たち自身も余震の恐怖でいつでも動けるような服装で休み、枕元には壊中電灯と携帯ラジオを常に置きながら寝るという環境下、「寒い、寒い」といい病気の心配が出てきたこと、また時間に関係なく声を発したり家の中を動き回る状態に、残りの家族の神経がいささか参ってきたこともあって、先のデイケア・センターに状況が落ち着くまでの間預かってもらえないか相談してみた。

即座にお世話しましょうとの回答だったので、震災から4日目だったと思うが、入所させてもらった。ところが翌日様子を確かめるべく電話をすると、お世話するスタッフのサイドが負傷や自宅の倒壊などで出勤できず、要員の確保ができないので退所願いたいとのことだった。

私たちは日中飲料水、食料の確保やボランティアの炊き出し等々で家を留守にすることも多く、考えあぐねていたところへ神戸から約40km西にあって、今回あまり被害のひどくなかった加古川市の知人がうまく収容先をアレンジしてくれ、ワイフの実家家族ともども一安心したような次第であった。我が家のケースよりもっとシリアスなケースを数多く見聞きしたが、病人やハンディキャッパー、それに保護者を失った子供達にとっては大変な事態であったに違いない。

今回の6,000人を超える死者の中には高齢者が数多く含まれていた。私の大学時代にゼミ（法思想史）を担当していただいた教授も、既に退官してご自宅で悠々自適の生活を送っておられたはずだが、新幹線の高架が落下した西宮の現場近くのご自宅で、潰れてきた家屋の下敷きとなり亡くなられた。享年88歳で、卒業時就職の際には身元保証人になっていたが、卒業後も時々ご自宅にお邪魔し、特に書齋は もちろん玄関先から居間に至るまでどっさり積み上げられた蔵書にいつも感心したものだ。勉強にはそれ程熱心な学生ではなかったが、書籍に親しむ良

い習慣を身を持って教えていただき、また俗っぽく言えば家の装飾品としては書籍類が最もふさわしいのではないかと思ったことが印象に残っている。ご冥福をお祈りする。

親会社への応援で収入の道確保

さてプライベートな面では様々なトラブル、アクシデントに見舞われたが、一方会社の方は同業他社に比べれば比較的恵まれていたといえよう。

旅行のキャンセルが相次ぎ、旅行市場の活況が期待すべくもないのは他社と同様だが、それに取って代わるものとして我が神鉄観光へ100%出資している親会社の神戸電鉄から人員派遣の要請があり、これがその後6月下旬まで続き、旅行部の収入を支えてくれた。同じことは兄弟会社の神鉄兵庫カンツリー倶楽部についてもいえ、震災でキャンセルが続出する中、キャディーさんを中心に親会社への支援活動に活路を見い出していた。

震災直後から各鉄道会社は線路の点検をし、安全性が確認された部分から順次運転を再開してきた。ところが神戸市東部から中心地・三宮にかけては阪急、阪神、JRの3社とも高架が倒壊し線路が使えない状態になっていた。

そんな中、JR福知山線が1月21日に運転を再開し、これを利用すれば神戸の最も中心に近いところまで鉄道で行けるルートが確保できるとあって大変な混雑ぶりであった。

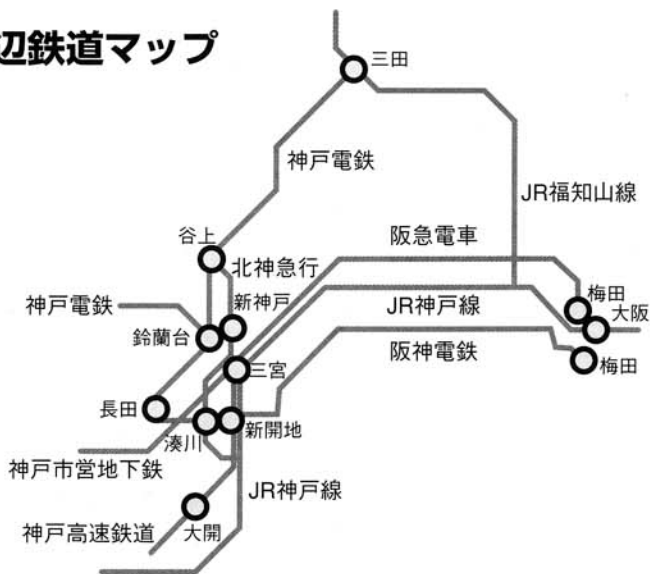
JR大阪駅から福知山線を利用して三田に入り、そこで神戸電鉄に乗り換え谷上駅へ、さらに六甲山の下を貫走する北神急行を利用すれば所要約2時間で新神戸駅まで達することが可能になる。

新神戸駅は三宮まで徒歩約10分の所にあり、このルートは例えば先程の3社の代替輸送バスが道路の渋滞で到着時間の予測ができないことに比べればたいへん便利で、かつ確実に時間の計算ができた。

北神急行は、1979年に神戸電鉄、阪急電鉄、そして神戸財界が設立した会社で、89年4月から六甲山の表と裏を結ぶ全線トンネルの鉄道として運行を開始していた。

今回は大阪からの乗客に加えて、神戸電鉄の定期乗車券を持っているお客様に対する代替えルートとしても機能しており、その方達に対する代替え証明乗車券の配布を含めて通常の数倍の乗客をいか

神戸周辺鉄道マップ



にスムーズに誘導するかがポイントとなった。

朝5時の始発前から各駅にスタンバイし、暫定的に終電としていた22時30分の発車を見届けてから解放されるという二交代制のこの応援作業・パートⅡは1月24日の応援を皮切りに、神戸電鉄がバスによる代替え輸送を含めて一応全線走行を開始する前日の2月6日まで続いた。

神戸電鉄応援業務パートⅡ

2月7日から神戸電鉄の鈴蘭台駅～長田駅間運行開始を受けて今度は長田駅～新開地駅のバスによる代替え輸送の乗客誘導業務を応援することになった。これは長田～湊川間のトンネル崩落によるもので、この作業は神戸電鉄が全線開通する6月22日の前日まで続くことになる。

旅行部員を中心に動員し、彼らは添乗やセールス、カウンター業務など接客業のABCはそれぞれ心得ており、乗客の皆様からは比較的評判だったと内心密かに自負している。

中には時間が掛かりすぎるとか、ピーク時立ち席をお願いするケースもあり、それに対するコンプレインとかいろいろあったが、皆様からの激励と同情にかなり勇気づけられたのは事実である。

6月21日最終バスの見送りに立ち会ったが、この間の苦労とそれにもかかわらず表だって苦情をいうことなくひたすら頑張ってくれた社員のことを思うと、ただただ感傷的に成らざるを得なかった。

この約5カ月に及ぶ親会社への応援業務と代替輸送に利用したバスのコミッション収入が、旅行部のこの年の収支にどれほど大きく寄与してくれた

ことか、これはラッキーであったし、またこの時ほど親会社と子会社の紐帯をありがたく思ったことは未だかつてなかったことである。

同業他社がリストラの名の下にダウンサイジングを進める中、我が旅行部がなんとか持ちこたえることができたのはひとえにこの応援業務による収入に負っている。

なおこの時社内の口さがない連中は、本来の旅行業をやっているよりもこの方が営業利益が大きいことを捉えて看板を換えたら、等と言っていたが余裕で聞き流すことができたものだ。

新コンピュータシステムの習熟

もう一つ不幸中の幸いといえると思うのが新コンピュータ・システムへの習熟の件である。まさかこの様な自然災害があるとは予想するすべもなく、我が社ではその前の年の秋に営業サイドにも使い易くかつ各営業所のデータが本社に居ながらにして瞬時にわかる社内LANシステムの導入を決めていた。正月明けの作業も一段落している3連休の初日にあたる1月14日、各営業所および総務部、経理部の社員を集めて約60名でソフト会社の方によるマシンの概要と使用方法を聞く説明会を開いた。

15・16日と休んで17日から従来のシステムからのデータの移し換え作業をやろうとしていた矢先の出来事で、この面ではかなり当惑した。導入決定と震災の順番が逆であつたら導入はなかったであろうし、また2カ月間の並行ランを経て新会計年度の4月1日より単独稼働というスケジュールにも変更を余儀なくされた。

結果的には並行テスト期間を予定よりも5カ月延

長し、9月1日より新システムの単独ランに切り換えたが、準備期間・習熟期間を十分に取れたこともあってスムーズに移行できた。

もちろんデータの入力作業もマーケットの落ち込みに比例して生じる時間の余裕に助けられて慎重かつ丁寧に進めることができ、予想より遥かに少ないデータの入力ミスで済んでいる。

これなどは震災がもたらした副次的効果の一つで、「人間万事塞翁が馬」を痛感した次第である。

様々な人間模様

阪神大震災についていろいろ思うところ、感じたところを展開してきたが、この震災が人間関係に微妙な軋轢を生じたケースも見てきたし、すべてのことに対して無気力になり、かつての生気はどこへ行ってしまったのか疑問に思わせる人も周囲にはおり、また何事にも怒りっぽくなった人もいる。

それ以外にも家のローンの返済が終わる前にこの震災に遭い、ダブルローンに苦しんでいる人もいれば、事業に失敗し行方知れずの人もいる。

ただこの様な動きの中で人間の右へ倣え式思考パターンについて考えさせられるケースに何度となく遭遇した。

それは特に旅行を実施するか中止するかを決断の時に顕著に見られ、「こんな時に旅行をするなんて不謹慎」という一言が全体を制してしまう。

これは昭和天皇崩御の際にも見られた現象だが、自発的な思考活動を停止させてしまうのは何とも残念で仕方がなかった。相次ぐ旅行中止に対応する中で、ややもするとひとグループぐらい動いてくれても良いのではないかといった旅行者としての立場と潜在意識がそう思わせるのかも知れないが、とにかくこの時期旅行は不謹慎、そしてレジャーの要素のあるものは軒並み中止または延期という発想にはいささかうんざりしたものだ。

メディアの報道姿勢について

前項とも若干重複するが、ある時期を境に神戸周辺ではあまりセンセーショナルな報道が、かえって神戸へのお客の来訪を妨げているのでは、というマスコミ不信感が頭をもたげてきた。

これは今神戸に行っても被災者の人たちは大変

で、かえって迷惑をかけますよといった内容の一部世論を指しているわけだが、地元では是非来て下さい、そして経済効果をもたらす消費に勤しんで下さいというのがある時期からの卒直な希望であったと思う。

一部不逞の輩が被災現場撮影ツアーを企画したり、また復旧作業に励む地元の人たちを支援するでもなくカメラを向けたり、被災地で記念写真を撮ったりといった非難はかなり耳にしたが、そこまできなくても神戸に行くことが罪悪というような感じを醸成させてしまった報道姿勢は、我々地元サイドから見ると何とも残念であった。

これは3月20日のオーム教団によるサリンガス事件で社会の関心がいっぺんにそちらに向き、逆に人々が安心して神戸に来られるという皮肉な結果を生んだように思うが如何だろうか。

通信手段について

今回の震災の中でボランティアの方たちの支援活動には頭が下がるが、彼らを効率よくアレンジできたのはインターネットやパソコン通信に依るところが大きいと思う。ただこれも私の自宅のように電気からも電話からも途絶された生活を余儀なくされると無用の長物と化してしまうわけだが…。

ちょうど1991年の湾岸戦争の時にテロリズムを警戒して、海外出張が禁止されたり極端に制限されたことがあったが、そのことがテレビ会議を普及させる契機になったのと同じように、今回電話回線が方々で切断し、電話が通じないと言った現象が多発したのを防ぐためにも携帯電話の所持は危機管理の初歩と言えなくもないと思う。

ただ電話の輻輳が携帯電話では妨げるのか、あるいは今回経験したことだがテレホンカードでは電話がつながらず10円玉を数多く持ち歩いたが、この2点についてはいつか専門家にその理由を質問させていただこうと思っている。

以上、阪神大震災に関して雑感を記してきたがご意見・ご質問等あれば下記のアドレス宛に電子メールをいただければ幸いである。

takashim@mb.infoweb.ne.jp または
BZY11756@niftyserve.or.jp

阪神大震災と私

県立須磨東高校二年

山崎奈緒

毎朝、何回となく起こされ、やっとの事でしぶしぶ起き出す。恥ずかしいけれどこれが私の日課でした。ただしあの日まで…。何度思い出しても体がふるえるような恐怖感は拭い切れませんが、私は確かにあの日を境に変わったような気がします。

今年のお正月は、いつものように、なにか良いことがありそうな、そんな予感がありました。5日、オーストラリアの高校生ルイズがホームステイにやってきました。一緒に学校へ通い、その後は家族ともあちらこちらへ出かけたり。特に蒜山高原の雪合戦は、初めて雪を見る彼女にとって最高のおみやげでした。いよいよ明日はお別れということで、16日は思い出話を弾ませながらの夕食会でした。

そして17日、あの一瞬は、何が起こったのか分からず、真っ暗な中、ふとんにもぐり込み、ふるえていました。父の「みんな大丈夫か」「大丈夫か」との大声でやっと我に返りました。

母は倒れたタンスに挟まれ腕と腰を痛めました。あとはみんな元気でした。さあ、それからが大変でした。ルイズを三宮まで送って行かねばなりません、しかし、スーツケースを積み込んで送り出したものの、道路という道路はいっぱいで、結局家へ引き返し、帰国できず、結局彼女はもう5日わが家に滞在することとなりました。



父は父で大変でした。バイクに乗り換え、三宮へ向かいました。ルイズの先生には連絡がついたものの、他の生徒も同様に出て来れず、結論が出るまで自宅で待機となったことを伝えてくれました。それから、父の会社のある新聞会館がめちゃめちゃになっていると話しました。

17日の夜は、全員一階に集まって、こたつに足をつっこみ一緒に寝ました。あとから

考えると笑い話になるのですが、父が「帽子をかぶって寝よう」といったので、それぞれ、私は「オリックス」、弟は「ライオンズ」、ルイズは「巨人」をかぶりしました。何かしらユーモラスでしたが、「頭を守るため」という父の真剣な言葉に、みんな帽子をかぶりなおして休みました。

翌日、落ちついて家を見直すと、屋根の瓦は落ち、壁中にひびが入り、タイルは割れ、食器類がたくさん壊れていました。母がけがで調子が悪いので、みんなの食事の準備はもちろん、家の片づけ、色々と私がやらねばならないことになりました。夕方、親戚の家が壊れ、板宿小学校に避難していると連絡が入り、父が迎えに行きました。家族が6人増え、私の家族とルイズ合わせて11人家族がスタートしました。私は母に代わってお世話係となり、朝から晩まで走り回りました。私もやればできるんだ、なんだか変に自信がわいてきました。

それから、灘の親戚のおばさんが亡くなったと連絡が入りました。市内で火葬できないため、岡山に出向き、その晩私の家の仏壇で仮通夜が行われました。何という地震だったのだろう、悲しくて悲しくて涙が止まりませんでした。あれから早や、4カ月。ルーズは、オーストラリアに帰り、日本は地震でこわかったけどみんなに会いにもう一度行きたい、と手紙をくれました。

母はすっかり元気になりました。父の会社も新しい所へ移りました。親戚も家を直し、戻って行きました。いろんなことがありすぎた4カ月、私はこの度の地震を機に、自分がなんだか大きく変わったと感ずるようになりました。自分は一人でなく、色々な人と人とのかわり合いの中で生きているのだと考えるようになりました。あまり意識しなかった、家族の大切さを感じるようになりました。家が落ちついてからボランティアへ出かけました。初めてのことであったのでなんだか気恥ずかしい感じでしたが、自分が人のために役に立っているということがうれしくて、積極的に参加しました。

実は私は、7月から1年間オーストラリアの公立高校へ留学する予定です。英語を勉強したり世界の人と仲良くしたいという単純なあこがれからスタートしたのですが、この度の経験を通して、自分自身のためでなく、もっと大きな、人のためになるような自分を磨く勉強をしたいと考えるようになりました。

この度は、学業継続が不可能というわけではなく、父に前借りしている留学費用に充てることができればと考え応募しました。

「ヒルトン奨学生」について

ヒルトン/JATA奨学金は、阪神大震災で被災したJATA会員会社の社員の子弟が今後も学業を続けられるようにとヒルトン・ホテル・コーポレーションが1,000万円をJATAに寄託した奨学金。

JATAでは被災子弟の高校生を対象に課題作文を募集し、入選者20名に一人あたり50万円の奨学金を贈った。授与された20名の奨学生(姉妹が二組あったため実人員は22名)は下記の通りですが、応募された課題作文のうちから山崎奈緒さんの作文を掲載させていただいた。

氏名	年齢	学校名 会社名(保護者)
松本美沙	17	神戸市立葦合高等学校 近畿日本ツーリスト
松本絵里	15	県立御影高等学校 近畿日本ツーリスト
北井夕紀子	16	県立鈴蘭台高等学校 ニューオリエントエクスプレス
杉谷達志	15	県立西宮今津高等学校 毎日新聞大阪開発
松村洋行	15	県立西宮北高等学校 川崎航空サービス
藤野佳奈	15	甲南女子高等学校 阪急交通社
藤野由季	15	甲南女子高等学校 阪急交通社
七條綾	17	神戸市立兵庫商業高等学校 国際ツーリストビューロー
山本圭司	16	滝川学園高等部 神鉄観光
竹内里衣子	16	県立北須磨高等学校 阪急交通社
加藤直樹	15	県立伊丹北高等学校 神戸観光旅行センター
松崎訓子	15	武庫川女子大学付属高校 ディービーツーリスト
米澤高宏	15	県立宝塚高等学校 近畿日本ツーリスト
山崎奈緒	16	県立須磨東高等学校 日本通運
植松誠之	17	県立長田高等学校 日本旅行
彭佳貞	17	県立東灘高等学校 エイシアンプロジェクト
安原麗美	17	親和女子高等学校 読売旅行
野口一彦	16	県立西宮高等学校 郵船トラベル
中村文香	16	神戸学院女子高等学校 インターナショナルツーリスト
結城陽二郎	17	私立岡山白陵高等学校 ヴィーヴル
横畠健	15	県立伊川谷北高等学校 日本旅行
浜口大輔	15	神戸市立葦合高等学校 日本旅行